メランコリックな王党派詩人
——ラヴレースの『ルカスタ』

The Melancholic Royalist to His Love: Richard Lovelace's *Lucasta*

笹川　渉
Wataru SASAKAWA

1. はじめに

リチャード・ラヴレース（Richard Lovelace, 1618–57）は、内乱期から共和政府・護国卿時代という激動の政変を経験した王党派詩人のひとりである。彼の韻文は、存命中に唯一出版した詩集『ルカスタ』（*Lucasta*, 1649）と、死後に出版された『ルカスタ——遺稿詩集』（*Lucasta. Posthume Poems of Richard Lovelace Esq*., 1659）に見ることができる。ラヴレースの詩集を編纂したC・H・ウィルキンソン（C. H. Wilkinson）によれば、「アルシアへ、牢獄から」（"To Althea. From Prison"）をのぞき、同時代に活躍した王党派詩人たち——ジョン・サックリング（John Suckling, 1609–42）、トマス・ランドルフ（Thomas Randolph, 1605–35）、ウィリアム・カートライト（William Cartwright, 1611–43）、ジョン・クリーヴランド（John Cleveland, 1613–58）——と比べると大きな人気を博すことはなく（Lovelace lxii）、また現代でも彼の作品を論じた批評は決して多いとはいえない。しかしながら、17世紀に「アルシアへ、牢獄から」が筆記された手稿の一覧によれば、現存する20の手稿に筆記されており、17世紀中葉の手稿文化に置いて、ラヴレースの作品の受容は決して小さいものではなかったことは間違いない（Beal 15–16）。

ラヴレースと同時代の詩人との関連については、『オックスフォード英国人名辞典』に簡潔にまとめられている。サー・フィリップ・シドニー（Sir Philip Sidney, 1554–86）と比較し、「高邁な理想に駆られて投獄、貧困、早死にした粋な詩人」であり、「ジョン・ダン（John Donne, 1572–1631）やベン・ジョンソン（Ben Jonson, 1572–1637）に影響を受け、アンドルー・マーヴェル（Andrew Marvell, 1621–78）の詩に影響を与え」、「チャールズ1世の治

本稿は2022年6月25日、オンラインで開催されたオベロン会での口頭発表、「Loveleace の *Lucasta* (1649) について——獄中の恋愛詩」の発表原稿に大幅に加筆修正を加えたものである。本稿の執筆に際しては、平成30年度——令和5年度科学研究費補助金（基盤研究C）「イングランド共和制下における王党派詩集と歌集のメランコリックな政治性」（課題番号18K00427　研究代表者　笹川渉）の助成を受けた。

世での忠誠、葛藤、激しい喪失を体現した」詩人としている（Anselment）[1]。例えば、ダン流の逆説を用いた口語的な言い回しは「歌。ジョン・ラニエ氏作曲。ルカスタへ、戦場に赴く」（‘Song. Set by Mr. John Laniere. To Lucasta, Going to the Warres.’）に見られる。ルネサンス的な恋愛詩では、詩的想像力を詩人に与えてくれる存在であるミューズは恋人に他ならないが、この作品では恋人の許を離れ、新たな恋愛の対象として戦で得られる「名誉」を追求するという。しかし、戦場をより愛するという不誠実さ（inconstancy）があるからこそ、いっそうルカスタのことを愛することができるという逆説が提示され、ダンに見られる女性嫌悪（ミソジニー）をテーマにした作品の系譜にあるといえる。

近年、ラヴレースについては内乱期の検閲や出版とマーヴェルの関係についても論じてられている（McDowell 184–87; Robertson）。1649 年に出版された『ルカスタ』には、17 篇の献呈詩が寄せられているが、そのひとつはマーヴェルの筆によるもので、議会派による『ルカスタ』の検閲を「あごひげを生やした検閲官が／残忍な長老法院のように君の本を調べだしている」（“The barbèd censurers begin to look / Like the grim consistory on thy book”, lines 21–22）と批判している。[2] 議会への反対を表明した廉で投獄されていたラヴレースによる詩集『ルカスタ』の受容を検討する点でも、王党派としてのマーヴェルの主張はさらに考察に値する。

本論では内乱期の韻文の特徴がよく出ていると考えられる恋愛詩集『ルカスタ』について、詩人とイングランド国王という関係のもとで考察をしてみたい。チャールズ 1 世を詩集『ルカスタ』に読み取ることに否定的な意見がある一方（Rudrum 186–89）、その試みは多くなされている（Reichardt; Robertson; Smith 255）。[3] 本論では、先行研究を踏まえ『ルカスタ』に描かれる女性像にチャールズ 1 世の姿が見られることを確認し、ルカスタを求めるラヴレースにメランコリー的気質を読み取ることを試みる。内乱期にラヴレースが『ルカスタ』に収められる恋愛詩を出版したことは、政治的権力を喪失しつつあった国王の復活を渇望する表現形態として考えられ、そしてその詩における修辞技法はメランコリーの表出として分析できるだろう。

---

[1] ラヴレースの伝記的事実は Wood 460–63, Wilkinson xiii–lxxi も参照。

[2] Marvell, “To His Noble Friend Mr Richard Lovelace, upon His Poems”（Marvell 21–22）. テクストの註で示されているように、「あごひげを生やした」（“barbèd”）には「鉤爪を持った」、「野蛮な」などの意味も含意されている可能性がある。

[3] William Hazlitt 編の詩集では、「アミントールの森、彼のクローリス、アリゴ、グラティアナ」（“Amyntor’s Grove, His Chrloris, Arigo, and Gratiana”）のアミントールが、外交官エンディミオン・ポーター（Endymion Porter）である可能性を提示しているが（84, note 2）、Dosia Reichardt は国王チャールズ 1 世とする分析を提示している。17 世紀の印刷本および手稿に登場するクローリスをチャールズ 1 世の王妃ヘンリエッタ・マリアとする読解については笹川を参照。

2. 恋愛詩と国王賛美

『ルカスタ』のモデルとされる女性は、ルーシー・サシェヴェレル（Lucy Sacheverel）という「美貌と財力を兼ね備えた女性」とされ、ラヴレースは彼女を「純粋な光」の意味である “Lux casta” と呼んでいたとされる（Wood 462）。ロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリーは、宮廷画家として有名なピーター・レリー（Peter Lely, 1618–80）と彼に習って版画を作成したウィリアム・フェイソン（William Faithorne, c. 1620–91）による『ルカスタ』（1649）と題された肖像画を所蔵し、彼女をラヴレースが詩集で称えたルカスタであると紹介している。[4]

しかし、ルーシーはラヴレースの知り合いであったようであるが、ラヴレースとの個人的な関係を示す証拠は残されていない。また、彼女とルカスタを同一視することが困難であることは古くから指摘され、「ラヴレースは自分の本に彼女の名前をつけたかもしれない。しかし、彼の詩の中でルカスタと呼ばれている人物を、彼自身が心の内で一貫して彼女と同一視していたとは、詩そのものから見て、信じられない」とする見解もあった（Judson 82）。特定のモデルではないとする場合、前述のとおり「ルカスタ」という名前は「純粋な光」を意味するため、彼女の属性を表現しているとともに、「象徴的な光が、内乱で暗くなりつつある世界を照らしている」と解釈することも可能である（Anselment）。[5] さらに、『ルカスタ』という個人の名前が掲げられた詩集であるにもかかわらず、この詩集には、アルシア、アマランサ、エリンダ、グラチアナといった多くの女性が登場することから、ルカスタが特別な恋人であることの意味は薄れているという印象は拭えない。

だが、ルカスタが特別な存在ではないことが、逆にこの詩集の本質を浮き彫りにしているとも考えることができるだろう。例えば、ルカスタ以外の人物に捧げられる愛は、本論冒頭であげた彼の代表作である「アルシアへ、監獄から」に描かれるが、ここでは恋愛詩の体裁をとった国王への賛美が見られる。ウッドによると、この作品はラヴレースが 1642 年に投獄されていた際、イングランド南東部ケント州都メイドストーンで、四季裁判所で議会派の主張を王党派の仲間たちと共に破り捨てたという廉により投獄されていた時に書かれた作品とされている（461）。「これほど人気を博した、17 世紀に書かれた単独の作品はほとんどない」とされているが（Wilkinson 276）、その理由は、王党派が抑圧された時代にあって、

---

[4] ナショナル・ポートレート・ギャラリーは 4 枚の版画を保有している。そのひとつとして以下のリンク先を参照（https://www.npg.org.uk/collections/search/portrait/mw40284/Lucy-Sacheverell）。なお、フェイソンは多くの肖像画を描いており、晩年のジョン・ミルトン（John Milton, 1608–74）の肖像画作者でもある。内乱期にはオランダやフランスに滞在していたとされ、イギリスに帰国した 1647 年 10 月 26 日、レリーとともに「塗師業者組合」（Painter-Stainers Company）の許可を与えられた。ラヴレースの詩とレリーの絵画の関係については Loxley 360–66 を参照。

[5] 同記事には同時代の文学作品での他の例として、ウィリアム・ハビントン（William Habington, 1605–54）のカスターラ（Castara「貞節」の意）や、トマス・ケイリー（Thomas Carew, 1595–1640）のカエリア（Caelia「天上の」の意）などがあげられている。

彼らの快楽を称揚するとともに、拘束された身体の自由を望みながら、国王を称賛することで、王党派の心情を代弁していたからだろう。語り手は牢獄で囚われの身となっており、「自由な翼を持った愛が／牢の扉に留まり」、恋人のアルシアの「髪に絡まり／目に縛られる時」、天使も知らないような自由を感じることができるという（1–7行）。[6] 第2連では、語り手にはピューリタンや議会派が否定する「溢れんばかりの盃」があり、「心配のない頭は薔薇に夢中」になって「ワインをちびちびと飲む」ことに幸せを感じる（9, 11, 13行）。1642年に囚われのラヴレースが語った王党派の享楽は、同年に内乱が勃発以降、形成不利となった王党派に共感を抱かせるものであった。

ラヴレースの声が内乱期における王党派のそれであることは、続く第3連と第4連でいっそう顕著になる。語り手はアルシアに愛を語る代わりに、「拘束されたムネアカヒワのように／以前より甲高い声で／美しさ、慈悲、壮麗さ／そして国王の栄光を歌う」のである（17–20行）。幽閉された語り手が主君を存分に讃える自由が、「洪水をまきおこす大風も知らない」とペトラルカ的な誇張法を用いて歌われることで、国王に向けられた恋愛詩に変貌する（23–24行）。さらに、最終連では最も有名な一節、「石の壁は牢獄を作ることはなく／鉄格子が檻を作ることもない」と歌い、語り手の愛情を抱く自由は身体的な束縛に影響を受けるものではないことを宣言する（25–26行）。ラヴレースは伝統的な恋愛の修辞法を用いながら架空の恋人アルシアに語りかけつつ、その対象は内乱により立場を脅かされる国王であった。

この傾向は「ルカスタへ、牢獄より。エポード」（“To Lucasta. From Prison. An Epode.”）でいっそう顕著に表現されている。この作品は1連4行、全14連56行からなり、語り手は現実にまたは比喩的に、恋人からの拘束と投獄された境遇を重ね、恋人の束縛から抜け出し新たな恋の対象を思い浮かべるという、いわば王党派的で浮気な性格を持った人物である。しかし、「ルカスタへ、戦場に赴く」で「戦争」や「名誉」が恋人であったように、この作品でも語り手が想像するのは現実の女性ではなく、「平和」（第3連）、「戦争」（第4連）、「宗教」（第5連）など、イングランドにおいて危機に瀕しているとラヴレースが考える概念が並べられる。しかしながら、語り手は「平和」から愛されることに不安を抱き、「戦争」は多くの人から愛されているために恋人としては難しいと諦め、「宗教」は深傷を負っている。その一方、「『宗教』を殺し、その手を縛るものが自由」だと語られる（19–20行）。

イングランドのボディ・ポリティックが語られる第6連では「議会」が恋人として提示され、予言的な響きがある。

---

[6] 恋人の「髪に絡まる」という表現は、ローマ詩人ティブルス（circa 55 BC–circa 19 BC）のエレジーに見られ、古典文学の影響を思わせる。ミルトンによる、友人を追悼する作品「リシダス」（“Lycidas”）では「ニーラの結んだ髪と…戯れる」（68–69行）という詩行が見られ、友人の死の悲しみを克服するには、詩作をおこなうよりも羊飼いの恋人と戯れていた方がいいのではと自問する。

議会を愛そう、
　天から送られた主な支えとして。
だが、ああ！頭を落とされた最も美しい体と
　結婚しようとするものがいるだろうか？

I would love a *Parliament*
　　As a maine Prop from Heav'n sent;
But ah! Who's he that would be wedded
　　To th' fairest body that's beheaded?　(lines 21–24)

擬人化した「議会」にその頭がないとする表現からは、1649 年 1 月に処刑台に昇った国王を想起させずにはいられない。しかし実際のところ、詩集『ルカスタ』は 1648 年 2 月に出版登録がされているため、1649 年 1 月の国王処刑に言及していると仮定するならば、1649 年 5 月 14 日に出版されるまでの間に、詩人は投獄中に加筆や修正を加えている可能性を考える必要がある（Robertson 92）。真実は不明だが、いずれの場合でも、議会の長である国王チャールズ 1 世が議会と対立し、国王が不在であることを表現していることは間違いない。

最終的に、語り手がルカスタの代わりに恋人として選ぶのは、第 11 連で言及される「国王」である。「. . . . . ぼくの愛情とぼくにふさわしい対象になりえない。／では何が残るだろうか？ぼくたちの愛情と喜びの／唯一の泉を除いては。それは国王である」（42–44 行）。語り手は地上に「迷妄」が広がることに怒りを覚えながらも（第 12 連）、「星の荷車（大熊座、北斗七星）」から送られる「聖なる光」に希望を抱き、「あなた」に仕える術を教えてくれる場所をすぐに照らすようにと望み作品は終わる。ルカスタに代わる愛の対象をチャールズ 1 世と名指しはしないものの、マーティン・パーカー（Martin Parker, circa 1600–circa 1656）が 1643 年にブロードサイド・バラッドとして流行させた「国王は再びその地位を味わう」（“The King Enjoyes His Own Again”）で歌われたように、「北斗七星」（“starry Wain”、別名 Charles's Wain）は、チャールズ 1 世を想起させることは明らかである。[7]

しかしながら、ラヴレースは最後まで賛美する対象が国王であると直接呼びかけることはしない。第1連でルカスタに対して呼びかける際には、近しい関係を表現する二人称の “thy

[7] 一般には「国王は再びその地位を味わう時」（“When the King Enjoys His Own Again”）のタイトルで知られ、18 世紀以降も繰り返し歌われてきた曲である。同時代のバラッドを見ると、例えば 1646 年王党派が敗北を喫したネイズビーの戦いを歌った「逆さまの世界」（“The World Is Turned Upside Down”）に「『国王は再びその地位を味わう時』の曲にあわせて」の指示が見られ、他にも多くの同様の曲があることから、この曲が広く流布していたことがわかる。

/ thee” を用いており、最終の第 14 連で「あなたの栄えある北斗七星」と語るときも同様に “thy” を用いている。しかし、そのあと続く、「あなたの栄えある北斗七星から／一筋の聖なる灯りをぼくに与えてほしい／ぼくがあなたに仕える術がわかる場所で／ぼくを照らしてください。そうすれば、あなたはぼくを信用します」と語る時の二人称は一貫して “you” であり、第 1 連とは別の人物であることを想起させるように人称を使い分けている。ラヴレースの詩群の内容、構文にはしばしば「曖昧」という形容が与えられるが（Hammond; King; Lovelace, *The Poems* lxvii）、国王処刑後に検閲制度が厳格化され、「多くの詩人たちが匿名の下に身を隠した」状況を踏まえると、このような曖昧さは「計画的であった可能性」が高い（Robertson 466–67）。その場合、恋愛詩という伝統的な文学形式を隠れ蓑にして、ラヴレースは巧妙に国王賛美をおこなっていることになり、詩集『ルカスタ』に収められたすべての作品ではないにせよ、国王を支持する熱烈な王党派の思いを語っている。

「ルカスタ」という名前に含まれる「光」という属性から国王との関連に注目してみよう。「ルカスタへ、牢獄より。エポード」の第 11 連でルカスタに代わる恋人として国王を見出したあとに続く第 12 連では、国王を太陽にたとえる。

地上を照らす太陽という球体であるその人は
　その球体を全てのものたちに提供している。
彼の権利を翳らせようとする時でも、
　目が見えなくとも、ぼくたちは、自身の光の中で立つ。

He who being the whole Ball
　　Of Day on Earth, lends it to all;
When seeking to ecclipse his right,
　　Blinded, we stand in our owne light.　（lines 45–48）

「地上を照らす太陽という球体」（“the whole Ball / Of Day on Earth”）という表現により、国王を太陽としてとらえているのであれば、スチュアート朝に広く受け入れられた王権神授説に基づく「太陽王」（Sun King）としての国王を想起させる。国王の権利を「翳らせる」（“eclipse”）もまた国王と結びついた言葉である。チャールズ 2 世が誕生した時、父のチャールズ 1 世が聖ポール大聖堂に詣で神に感謝を捧げにいくと、日蝕（と明けの明星）が観測されたという（*Stella* 4）。その天体現象を慶事の印としてとらえた王党派の詩人たちは、チャールズ 2 世の生誕を言祝ぐ作品でテーマのひとつとして選んだ。太陽は、自分より輝かしい地上に生まれた＜太陽＞、つまり幼子キリストになぞらえられたチャールズ 2 世を見るのに恥入り、顔を隠したという言い回しが見られ、そこで使われているのが

“eclipse” である（“An Anniversary” 5; Corbett 84–85; *Stella* 5–6）。旧約聖書の『マラキ書』4 章 2 節に描かれる「義の太陽」がキリストの予型と解釈されたことから、神である国王は太陽だけでなく、キリストとしても表現された。

この作品のタイトル「牢獄から」にしたがうと、ラヴレースが 1642 年あるいは 1648 年に投獄された際の作品と考えられ、執筆時期を決定することは難しいが、いずれにしても内乱が始まる年、または国王処刑の前年という、議会派と国王の対立が明確であり国王の権利が「翳って」いた時期であることは間違いない。構文上、「翳らせようとする」のは私たちと理解されるが、国王が「全てのものたちを照らす」光であることから、「私たち」は語り手も議会派も含む全てのイングランド国民の総体と考えられ、“thou” と “you” の使い分けを曖昧にすることと同様に、主体を曖昧にすることもラヴレースの戦略と考えることができる。

「隠遁からルカスタを呼ぶ」（“Calling Lucasta from Her Retirement”）もまた、内乱期中に国王の復活を望む作品である。全 11 連からなるこの作品では、「黒い部屋の陰鬱な記念碑」で「聖なる」ルカスタが貞節の炎を胸に「隠している」（＝埋葬している）場面から始まり、語り手はルカスタに対して墓所さながらの場所から立ち上がり、「もっとも白くもっとも高いぼくたちの丘に登る」（“climb our whitest, highest hill”）ようにと呼びかける。「白い」という形容からは、国王がロンドンのホワイトホール宮殿に君臨することを期待していると考えることができるだろう。「天上の真実を持った／力強い光線のような神々しいルカスタ」（“Sacred Lucasta, like the pow’rfull ray / Of heavenly truth”）には、太陽王としての国王が再び重ねられていることが想起される。ルカスタが放つ光線を「軍旗」（“strands”）とし、ルカスタを呼ぶはずの合図は「甲高いトランペット」、「砲撃」、「太鼓」とあるが、語り手が望むのは平和な世界でルカスタが君臨することである。死者の中から蘇ったルカスタの前では「全てのものが忠誠を尽くし」、「ルカスタの思いのみが叛逆を起こしている」。換言すれば、「内乱」がおさまった世界であっても、語り手の議会派への許し難い怒りが、ルカスタの胸の内として語られている。

ラヴレースにとって、国王は監獄にいる彼を照らす光であり救世主であった。詩集『ルカスタ』において、特定の人物によらずさまざまな恋人を通じて、王党派の希望である国王を表現することは、エリザベス朝の恋愛詩の伝統に則し、新プラトン主義的な天上のイデアを国王と読み替えたものに他ならない。『ルカスタ』は伝統的な恋愛詩に政治的な言及が加わった内乱期を反映した詩集となっている。『ルカスタ』に収められた全ての作品が国王に向けられているわけではないにせよ、ラヴレースはキリストに重ねられた国王が放つ光を詩集の女性たちに投影している。

3. メランコリックなラヴレース

これまで見てきたラヴレースの世界は、「『確実に失われる』という認識からくるもの」ということが言える（Cummings）。エリザベス朝のソネットの伝統に従えば、語り手と恋人の愛が成就しないのは定型に沿った内容である。しかし、国王が不在、あるいは王政が危機に瀕している時代に、牢獄にいるラヴレースが『ルカスタ』におさめられた作品を執筆したことを考えるならば、ルカスタがイデア的な存在として描かれざるを得ないことには理由があると言える。つまり、「ルカスタへ、牢獄より。エポード」に登場する頭を失った議会や、「隠遁からルカスタを呼ぶ」での墓の中にいるルカスタは、語り手の喪失感が表出したものである。

そのような喪失感について、ジョルジュ・アガンベンによるメランコリーの分析を参照したい。彼はフロイトの精神分析と、教父たちの主張の類似点を述べるなかで興味深い指摘をおこなっている。

> 悲哀との類比を続けるなら、メランコリーは対象を喪失することに先立ち、それを予期して嘆くことを考えている、というパラドックスを提供していると言うべきであろう。ここで精神分析は、教父たちによって直観的に得た結論と酷似した結論に達しているようだ。教父たちは怠惰を、実際には失われていない幸福からの後退とみなし、怠惰のもっとも恐ろしい娘である絶望を、非成就と地獄堕ちを予感させるものと解釈をした。怠惰において、退行が欠如に由来するのではなく、狂気的に欲望が高まることに由来し、この欲望の高まりは、その欲望の対象を失わないようにと自らを守り、その対象が少なくとも不在である時にその対象に固執しようとする絶望的な試みをして、その対象が近づきがたいものになる。それと同じように、メランコリーのリビドーの後退は、実際にはいかなる所有も不可能な状況の中で、所有を可能にしようとする目的以外のどのような目的もない。この観点に立つと、メランコリーは、愛する対象の喪失への退行的な反応というよりも、所有することができない対象をあたかも喪失したかのように見せる想像的な能力である。（Agamben 20）[8]

アガンベンは、修道士たちが陥る「怠惰」と現代のメランコリーの類似点を、両者ともに求める対象が手に入れることができないことにあると指摘する。中世の修道士たちが「怠惰」に陥りやすいのは、メランコリックな者の特徴である、所有が不可能であるものを喪失するという想像的な体験を想像しているからに他ならない。したがってメランコリックなラヴ

[8] 本論の和訳については、英訳とともに岡田温司訳『スタンツェ』を参考にした。

レースの詩においては、イデア的な恋人である国王も、そして国王と同一視された絶対者である神も永遠に手に入らないことで意味をなす。『ルカスタ』に現れる恋人たちは、語り手が抱擁することができない対象なのである。

ラヴレースだけではなく内乱期の王党派詩人の特徴は、国王を神の領域にまで高めることによって、所有していない、あるいは所有できない対象である国王を想像的に描きだしたことに特徴がある。王権神授説を支持した王党派詩人たちは、スチュアート朝の国王を「太陽王」として祀り、救世主イエス・キリストになぞらえるなど、一種の幻想を作り上げ、その幻想を共有し、国王をテーマとした作品を生産、再生産し続けてきた。特に、ラヴレースは韻文を通じて、内乱期から共和政府・護国卿時代にかけて、そのような幻想を宗教的愛に極めて近い形で恋愛詩という枠を通じて提示したと言えよう。確かに、「ルカスタへ、牢獄より。エポード」や「隠遁からルカスタを呼ぶ」に見られるような、恋愛対象を救世主に重ねて描きだす試みは、ジョン・ダンの『聖なるソネット』(*Holy Sonnets*) などに先例を見ることができる (Corns 77)。ダンのソネットでは、恋愛詩の枠組みを用いて、花婿キリストの花嫁になることを切望する語り手を見ることができる。キリストとの結婚というテーマをさらにさかのぼれば、旧約聖書の『雅歌』に見られる男女をキリストと教会の結婚として解釈する例を見ることができるが、ラヴレースの場合、恋愛詩を通じて国王を描いている点で特異な時宜的作品である。

『ルカスタ』におさめられた「キリギリス――気高い友チャールズ・コットン氏に捧ぐ――」("The Grasshopper. To My Noble Friend, Mr. Charles Cotton") は、メランコリックな雰囲気に支配された状況を、友人と共に過ごした経験を詩に残すことで癒そうとする、いわばロバート・バートン的な紙上の試みとして解釈できるだろう。[9] この作品では、快楽的な生活を送り、冬を前にしながら何の備えもしないキリギリスに対して、語り手は「哀れで愚かな馬鹿者」と呼びかける一方、語り手自身も享楽的生活を否定するわけではなく、友人コットンとの友情を温めながら、楽しく冬を過ごすという内容である。なお、献呈の対象となっているのは、アイザック・ウォルトン (Izaak Walton, 1593–1683) の『釣魚大全』(*The Compleat Angler*, 1653) の第 2 部を執筆したチャールズ・コットン (Charles Cotton, 1630–1687) と同姓同名の父親で、ベン・ジョンソンの友人とされている。

詩では冬を前に陽気に過ごすキリギリスが、秋の楽しい日々に「人々と、／君自身とメランコリックな小川を陽気にする」("[thou] mak'st merry men, / Thyself, and melancholy streams." 11–12 行) ことが語られるが、収穫の後に来る冬によって、そのような愉快な

[9] 自らがメランコリーを患っていたというロバート・バートン (Robert Burton, 1577–1640) にとって、『メランコリーの解剖』(*The Anatomy of Melancholy*, 1621) を執筆すること自体がメランコリーの治療法であった。". . . I doubt not but that these following lines, when they shall be recited, or hereafter read, will drive away melancholy . . ." (Burton 24) .

日々は続かないことが述べられる。

でも、ああ。鎌だ！黄金の穂は刈りとられる。
　ケレスとバッコスも、おやすみを告げる。
鋭い霜の指が触れると君の花をすべて摘み取って、
　鎌から救われても、風が全てを刈り取ってしまう。

But ah, the sickle! Golden ears are cropped;
　　Ceres and Bacchus bid good night;
Sharp, frosty fingers all your flowers have topped,
　　And what scythes spared, winds shave off quite.（lines 13–16）

ここでは喜ばしい秋の実りを讃えるというより、豊穣を表すケレスやバッコスは姿を消さざるをえないことから、農耕の神サトゥルヌスと同一視された時の神クロノスが持つ大鎌の破壊性を想起させる。同時にサトゥルヌスの支配は、この神が体現するメランコリーが人々を支配することを感じさせる。

しかしながら、夏が去ってしまったがゆえに、「おたがいの胸に本当の夏を創り出す」という逆説を用いてふたりの友情を確かめあう（22 行）。「ウェスタの炎のように／ぼくたちの聖なる炉は永遠に燃え続ける」と、炉の女神ウェスタによって表象される女性の貞節さがふたりの心に宿ることが示される。性が転倒したふたりは、聖なる愛として神を求める。その愛情は「北風が持つ霜が広がる羽」も溶かす火山「エトナ山」ほどの力であり（27–28 行）、もしふたりの国王支持者が持つ愛の対象を国王と想定するならば、花婿キリストを求める教会という伝統的な聖書解釈が念頭に浮かぶだろう。

実際に続く第 8 連には国王を思わせる「12 月」が登場する。雨まじりの「12 月」は涙を流しながら登場するが、ふたりが「古代ギリシャの雨」を浴びると、「12 月」は再び威勢を取り戻す。

雨を落とす「12 月」は泣きながらやってきて
　自らの支配を簒奪されたことを嘆く。
だが、古代ギリシャの雨を浴びて僕たちが始めると
　「12 月」は叫ぶだろう、王冠を手に入れる！と。

Dropping December shall come weeping in,
　　Bewail th'usurping of his reign:

But when in showers of old Greek we begin,
Shall cry he hath his crown again! （lines 29–32）

ここで「12 月」が泣いている理由はなぜであろうか。ロバート・ウィルチャー（Robert Wilcher）は、泣いている「12 月」を、議会派とピューリタンによる取り締まりの対象であったクリスマスであると主張している（308–9）。ジェイムズ 1 世は『娯楽の書』を通じて民衆に娯楽を奨励し、その再版を命じたチャールズ 1 世も安息日である日曜日にメイポールなど異教の祭りに由来する娯楽を推奨したことにより、議会派との対立を深めることになった。特に問題となったのが、異教的とされた祝祭のひとつであり、聖書の記述に根拠をもたないクリスマスである。17 世紀イングランドにおけるクリスマスの是非をめぐる論争をここで十分に論じる余地はないが、国王がクリスマスを守護する存在であった例をひとつあげておこう。ブロードサイド・バラッド「逆さまの世界」は、王党派がネイズビーの戦いで敗北を喫したことを歌っているが、「聖なる日々が軽蔑され／新しい流行が考案される／クリスマスの翁は街から追い出される」ことが語られ、最終連では「クリスマスがネイズビーの戦いで殺された」という知らせが届く。国王がキリストとして言祝がれていたこととともに、イングランド国王はクリスマスと同義であったことを考慮すれば、ラヴレースの描く「12 月」が「王冠を再び手に入れる」ことを主張する姿は、イングランド国王が復権を望む声に他ならない。その際に「ぼくたち」が「古代ギリシャの雨」――ワインを想像させる――に浴すると、涙する「12 月」、あるいは国王が元気な世界を取り戻す。これは議会派に否定されていたクリスマスの復権でもある。ふたりが掲げる盃からは楽しげな様子が思い描かれるものの、その声の背後にある現実での喪失感が現前している。

12 月に救世主の降臨を希望することはテクストからも明示されている。「ルカスタへ、牢獄より。エポード」に見られたように、第 1 連から第 3 連では “thou” と呼びかけられていたキリギリスは、第 4 連で “you” に変化し、この後に続く内容では国王を示唆するものとなっている。語り手たちが持つ「蝋燭」の灯りは「澄んだ宵の明星」のように輝き夜を追払い、「永遠なる明るい日」をもたらすという（33–34, 36 行）。宗教的な響きを持つ「永遠なる明るい日」はキリストの到来を意味するだろう。ロンダル・デイル（Randall Dale）は、フランシス・クォールズ（Francis Quarles, 1592–1644）による 14 番目のエンブレムを参照しながらこの作品を読解し、図版で言及される明けの明星と蝋燭が表す宗教性と、ラヴレースと友人の頭上に宵の明星が輝き、蝋燭の灯りで酒を片手に友情を温めることの対比を論じている。デイルはラヴレースの詩では宗教的重要性より人間の友情が強調されていることを指摘するが、王権神授説に基づいたキリストと国王の同一視を念頭におく必要もある。王党派詩人マーティン・ルエリン（Martin Lluelyn, 1616–82）による「1644 年の公現祭、十二夜に国王に歌われたキャロル」（“Caroll Sung to His Majesty on Twelfe-day being

the Epiphany. 1644”）では、東方の三博士のひとりが金星に言及し、「明けの明星は早朝に太陽の先触れとして天駆け、／敬意を表してその輝きを幼子に送る」と、救世主に国王を重ねて歌っている（110）。キリストを明けの明星に譬えることを知っていたであろうラヴレースが宵の明星を提示しているのは、夜に酒を酌み交わしているからだけではなく、救世主である国王の復権がなされていないことを示唆しているからと考えることができる。ラヴレースとコットンが灯す蝋燭の灯りは、政治と宗教が一体となった「永遠なる明るい日」を示し、「古代ギリシャの雨」の中で宴を開く王党派的カルペ・ディエムの世界観の背後には、満たされない現実への願望が表出している。

4. 最後に

内乱期以降に受容されたラヴレースの詩は、王党派の作品群という大きな枠組みの中で理解されるべきものだろう。前述のとおり、ラヴレースの作品は印刷本だけではなく、手稿としても広く回覧されていたが、好古家イライアス・アシュモール（Elias Ashmole 1617–92）が一部を筆記した手稿 Ashmole 36/37（ボドリアン図書館蔵）には、「アルシアへ、監獄から」がおさめられている。その詩の前後には、1643 年ハーグから帰国した女王と国王チャールズ 1 世がエッジヒルで再会したことについての詩、王党派の軍人初代ホプトン男爵ラルフ・ホプトンの敗戦、王党派が勝利したバンベリーの包囲を歌ったバラッド、議会派として戦った第 3 代エセックス伯ロバート・デヴァルーの葬儀の作品などの内乱期の作品が筆記されるなかにラヴレースの恋愛詩が配置されることで、ひとりの王党派の声という役割を間違いなく担っている。また、1659 年に出版された『エアとディアログ撰集』（*Select Ayres and Dialogues*）では、王党派の作曲家ジョン・ウィルソン（John Wilson, 1595–1674）が「アルシアへ、監獄から」に作曲した楽譜が印刷され、愛唱されていたことがうかがえる（97）。

手稿や出版文化を通じて形成された共同体には、内乱期以前への「ノスタルジア」が見られる（Marotti 72）。メランコリーが王党派に蔓延しており、ラヴレースは神と同一視された所有しえないイングランド国王を、喪失した対象として表現した。ラヴレースは、『ルカスタ』におさめられた伝統的な恋愛詩を通じ、イデアを体現する恋人の描写に政治色を加え、国王不在の期間における王党派の喪失感を反映した作品を生み出した詩人といえるだろう。

引用文献

Agamben, Giorgio. *Stanzas: Word and Phantasm in Western Culture*. Translated by Ronald L. Martinez, U of Minnesota P, 1993.

"An Anniversary Ode, upon the Kings Birth Day. May 29. Written for This Yeare 1654. Being His 24 Yeare. To His Majesty." Hague, 1654. *Early English Books Online*, http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000549089/fulltext.

Anselment, Raymond A. "Lovelace, Richard (1617–57), poet and army officer." *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford UP, 2010. https://www-oxforddnb-com.hawking1.agulin.aoyama.ac.jp/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-17056.

Ashmole 36/37. The Bodleian Library.

Beal, Peter. *Index of English Literary Manuscripts*. Vol. 2, part 2, Mansell Publishing, 1993.

The Bible. Authorized King James Version, Oxford UP, 1998.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. Edited by Thomas C. Faulkner et al., vol. 1, Oxford UP, 1989.

Corbett, Richard. *The Poems of Richard Corbett*. Edited by J. A. W. Bennett and H. R. Trevor-Roper, Clarendon Press, 1955.

Corns, Thomas N. *Uncloistered Virtue: English Political Literature 1640-1660*. Oxford UP, 1992.

Cummings, Robert. "Lovelace, Richard (1618–57)." *The Literary Encyclopedia*. www.litencyc.com.

Dale, Randall J. B. "Reading the Light in Lovelace's 'The Grasshopper.'" *College Literature*, vol. 16, no. 2, 1989, pp. 182–89. *JSTOR*, https://www.jstor.org/stable/25111815.

Hammond, Gerald. "Richard Lovelace and the Uses of Obscurity." *Proceedings of the British Academy*, vol. 71, 1985, pp. 203–34.

Judson, Alexander C. "Who Was Lucasta?" *Modern Philology*, vol. 23, no. 1, 1925, pp. 77–82. *JSTOR*, https://www.jstor.org/stable/433853.

King, Bruce. "'The Grasse-hopper' and Allegory." *Ariel: A Review of International English Literature*, vol. 1, 1970, pp. 71–82.

Lluelyn, Martin. *Men-miracles, with Other Poemes*. London, 1656. *Early English Books Online*. http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000660369/fulltext.

Lovelace, Richard. *Lucasta*. Edited by William Hazlitt, John Russell Smith, 1864. *Google Books*, books.google.com.

---. *Lucasta: Epodes, Odes, Sonnets, Songs, &c. To Which Is Added Aramantha, a Pastorall*. London, 1649. *Early English Books Online*, http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000632998/fulltext.

---. *The Poems of Richard Lovelace*. Edited by C. H. Wilkinson. Clarendon Press, 1930.

Loxley, James. "Poetry, Portraiture and Praise: Suckling and Van Dyck, Lovelace and Lely." *The Seventeenth Century*, vol. 32, no. 4, 2017, pp. 351–69.

Marotti, Arthur F. "Manuscript, Print, and the Social History of the Lyric." *The Cambridge Companion to English Poetry, Donne to Marvell*, edited by Thomas N. Corns, Cambridge UP, 2006, pp. 52–79.

Marvell, Andrew. *The Poems of Andrew Marvell*. Edited by Nigel Smith, Pearson, 2003.

McDowell, Nicholas. *Poetry and Allegiance in the English Civil Wars: Marvell and the Cause of Wit*. Oxford UP, 2008.

Milton, John. *Complete Shorter Poems*. Edited by John Carey, 2nd ed, Longman, 1997.

Parker, Matrin. "The King Enjoyes His Own Again." 1665. *Early English Books Online*, http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000592438/fulltext.

Quarles, Francis. *Emblemes*. London, 1635. *Early English Books Online*, http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000558333/fulltext.

Reichardt, Dosia. "Another Look at 'Amyntor's Grove': Pastoral and Patronage in Lovelace's Poem." *Early Modern Literary Studies,* vol. 11, no. 3, Jan. 2006, pp. 1–20, https://extra.shu.ac.uk/emls/11-3/reicamyn.htm.

Robertson, Randy. "Lovelace and the 'Barbed Censurers': *Lucasta* and Civil War Censorship." *Studies in Philology*, vol. 103, no. 4, 2006, pp. 465–98. *JSTOR*, https://www.jstor.org/stable/4174862.

Rudrum, Alan. "Royalist Lyric." *The Cambridge Companion to Writing of the English Revolution*, edited by N. H. Keeble. Cambridge UP, 2001, pp. 181–97.

Smith, Nigel. *Literature and Revolution in England*. 1640–1660. Yale UP, 1994.

Stella Meridiana Caroli Secundi regis, &c. Verses Written 31 Years Since, upon the Birth and Noonday Star of Charles, Born Prince of Great Brittaine the 29 of May 1630. London, 1661. *Early English Books Online*, http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000549089/fulltext.

Wilcher, Robert. *The Writing of Royalism 1628–1660*. Cambridge UP, 2001.

Wilson, John. *Select Ayres and Dialogues for One, Two, and Three Voyces, to the Theorbo-lute or Basse-viol*. London, 1659. *Early English Books Online,* http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000607636/fulltext.

"The World Is Turned Upside Down." London, 1646. *Early English Books Online*, http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000592438/fulltext.

Wood, Anthony à. *Atheniae Oxonienses*. Edited by Philip Bliss, vol. 3, printed for F. C. and J. Rivington, et al, 1817.

アガンベン、ジョルジュ『スタンツェ——西洋文化における言葉とイメージ』岡田温司訳、筑摩書房、2008 年。

笹川渉「牧歌と神話のクローリス——イングランド内乱期および共和制のミセラニーと歌集から」『緑の信管と緑の庭園』岩永弘人他編　音羽書房鶴見書店、2021 年、279–312 頁。